

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

—木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

目 次

- | | |
|--|---|
| ○シリーズ 貴重図書23—東北大学附属図書館
所蔵 マルクス／エンゲルス貴重書閲覧シス
テムについて……………1 | ○田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示「未知
への挑戦」を開催……………26 |
| ○連載 和算資料の電子化（1）：和算資料電子
化計画の概要……………14 | ○平成15年度目録システム地域講習会を開催…27 |
| ○和算入門……………17 | ○第58回東北地区大学図書館協議会総会…………27 |
| ○研究者等作成データベース公開事業の開始…20 | ○会 議……………27 |
| ○お知らせ 平成15年度東北大学附属図書館
企画展「明治・大正期の文人たち
—漱石をとりまく人々—」開催…………24 | ○人事異動……………28 |
| | ○編集後記……………28 |

シリーズ 貴重図書23

東北大学附属図書館所蔵

マルクス／エンゲルス貴重書閲覧システムについて

久保誠二郎 窪俊一 大村泉

はじめに

東北大学附属図書館には、マルクス／エンゲルスに関わる貴重な書物が多く所蔵されています。刊行当時の初版本のみならず、マルクスが自身の著書に献辞を入れ第三者に献本した本、またマルクスが自著を手元に置き、そこに書き込みを加えた手沢本（自用本）が所蔵されています。こうした資料は、当時のマルクス／エンゲルスの交遊関係の追跡、また思想形成の究明において、またとない貴重な情報をもたらす一次資料となっています。なかでも『哲学の貧困』マルクス手沢本は、著者であるマルクス自身が数多くの書き込みを残しており、マルクスの思想を精密に解明する内外

のマルクス研究において、大いに注目される資料です。このマルクス自用本『哲学の貧困』画像データベースは、昨年11月の国際会議（「国際 MEGA2（新『マルクス／エンゲルス全集』）コロキウム」）において試作品が公開され、日本人関係者はもちろん、ドイツ、中国、韓国の専門家から大きな関心呼びました。

今回、マルクス／エンゲルスの著書の初版本、著者献辞入り版本、また『哲学の貧困』手沢本など、当図書館が所蔵するマルクス／エンゲルス貴重書を、デジタル画像化し、マルクス／エンゲルス貴重書閲覧システムとして当図書館ホームページ上で公開する運びとなりました。

そこでここでは、まずデジタル画像化された貴重書の概要を紹介し、さらに内外から注目される『哲学の貧困』マルクス自用本データベース化を、また閲覧システム作成過程で見出されたフランス語版『資本論』の意外な発見、これらを取り上げてマルクス／エンゲルス貴重書閲覧システムの紹介とします。（画像1）

画像1 貴重書閲覧システム マルクス・メニュー画面



I 収録されたマルクス／エンゲルス貴重書一覧

閲覧システムに収録された貴重書は以下のとおりです。

表1 マルクス／エンゲルス貴重書閲覧システム収録書一覧

カール・マルクス Karl Marx	特徴
『独仏年誌』(1844年) Deutsch-Französische Jahrbücher	アーノルト・ルーゲ、マルクス編集
『哲学の貧困』フランス語初版(1847年)＊1 MISERE DE LA PHILOSOPHIE	マルクス手沢本、櫛田民蔵旧蔵
『経済学批判』第1分冊(1859年) Zur Kritik der Politischen Oekonomie.Erstes Heft	正誤表を含む版本

『フォークト君』(1860年) ＊2 Herr Vogt	マルクスからエンゲルス宛献呈本
『資本論』第1巻ドイツ語初版(1867年) ＊3 Das Kapital.Kritik der politischen Oekonomie.Buch 1.	マルクスからボルクハイム宛献呈本
『資本論』フランス語初版(1873-75年) ＊4 LE CAPITAL	マルクスからパスカル宛献呈本(ラシャトル版とオリ オル版の合本), 河上肇, 櫛田民蔵旧蔵。他にガブリ エル・ドヴィル署名入り本, 中野文庫所蔵本。
『哲学の貧困』ドイツ語訳(1885年) DAS ELEND DER PHILOSOPHIE	ドイツ語訳初版本
『資本論』英語初版(1887年) CAPITAL: A CRITICAL ANALYSIS OF CAPITALIST PRODUCTION	『資本論』英語初版本

フリードリヒ・エンゲルス Friedrich Engels	
『家族, 私有財産および国家の起原 ルイス・H・モーガンの研究に関 連して』1884年 Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats./ Im Anschluss an Lewis H.Morgan's Forschungen	初版本
『オイゲン・デュリング氏の科学の変革』(1887年) Herrn Eugen Dühring's Umwälzung der Wissenschaft.	1877年, 1878年に刊行されたものの 合冊本。正誤表を含む。

閲覧システムには、これら計12点のマルクス／エンゲルス貴重書のデジタル画像を収録しています。収録した範囲は、基本的に表紙や見返しなどと、本文のうちの第1章です。加えて、マルクスの自筆での書き込みや旧蔵者の書き込みのある箇所も収録しています。

これら貴重書の特徴、由来などの解説は、各貴重書の最初の画面に表示されるようになっています。

表1で、書名の後に＊を付した書物は、マルクスの何らかの書き込み(献辞を含む)があるものです。＊1『哲学の貧困』はマルクスが手元においていた手沢本です。これは次章で述べましょう。＊2『フォークト君』は、マルクスがエンゲルスに献本したもので、マルクスの自筆献辞があります。＊3『資本論』ドイツ語初版は、マルクスがボルクハイムに献本したもので、これにもマルクスの自筆献辞があります。また、ボルクハイム自身の書き込みもあります。＊4『資本論』フランス語版初版は、マルクスのパスカル宛献呈本です。なお、フランス語版『資本論』は他に2点収録していますが、これはIIIで紹介しましょう。

表1から伺えるように、当閲覧システムが収録する貴重書は、マルクス／エンゲルス著書の初版本のみならず、マルクスの献辞などの書き込みが存在する点で、大変意義深いものとなっています。冒頭で述べたように、これら献辞入り献呈本は、当時のマルクスの交遊関係を示す資料として、また書き込みはマルクスの思想の究明にとって、またとない資料となります。

加えて、『哲学の貧困』マルクス手沢本の旧蔵者は櫛田民蔵、フランス語版『資本論』の旧蔵者は河上肇、櫛田民蔵というように、この2点の貴重書が戦前日本の代表的なマルクス経済学者の旧蔵書であったことも、この書物の辿った歴史への興味をかきたてるものでしょう¹。(画像2-1, 2-2)

1 この経緯については大村泉「櫛田民蔵文庫」『広報』No.182東北大学広報委員会1998年、大村泉『新MEGAと『資本論』の成立』八朔社1998年を参照。

画像2-1 パスカル本 マルクス献辞箇所



C. パスカル宛てマルクス自筆献辞

“ Au citoyen C.Pascal / Londres 30 Dec.1873 /Hommage de l'auteur ”

「C. パスカル様。著者謹呈。ロンドン，1873年12月30日」

C. パスカルはイギリス在住の牧師で，パリ・コンミュンの亡命者のためにマルクスがロンドンで活動していた際の協力者。

画像 2-2 パスカル本 河上肇献辞箇所



標題紙の右側 河上肇自署「1925年9月23日堀経夫君より欧行記念として受く」

堀は，東北帝国大学に赴任した直後の1923年から2年間ロンドンに留学し、『資本論』の引用・参照文献を中心に文献蒐集を行った。その際に購入したこの本を，堀が河上に贈呈した。

左側 河上肇自筆献辞「拝呈 榊田學兄 河上肇。」

当時，マルクス経済学の著名な学者であり，京都帝大教授でもあった河上は，1928年に辞職を余儀なくされ，1932年には官憲の手から逃れるために榊田宅に逗留した。その時の謝礼として，この本が河上から榊田に贈呈された。

貴重書閲覧システムには、マルクスの書き込みが存在する著書だけでも4点含まれています。これだけの貴重な資料のインターネット上での公開は、内外でも珍しいものといえます。

それではまず、デジタル版『哲学の貧困』マルクス手沢本を紹介します。これは今回公開される貴重書閲覧システムにおいて、マルクスの書き込みが最も多い書物です。この手沢本をデジタル化するにあたっては、単にデジタル・テキスト化することにとどまらず、書き込み箇所と当該箇所の解説テキストとをリンクさせるなど、より視角的に理解可能な画面構成を企図して作成されています。つまり、デジタル化の利点を生かすことで、いっそうの研究利用に供するために作成された画像データベースです。これは内外でも例の無い試みとして注目されていますので、作成の経緯を含めて紹介しましょう。

II デジタル版『哲学の貧困』マルクス手沢本

1. デジタル化の試み

マルクス／エンゲルスの思想や理論の生成を検討するとき、二人が自ら刊行した著作や論文に刊行後どのような手入れをし、再版などに備えていたのかを明確にする必要があります。こうした研究を進める場合、これらの諸文書に残されている欄外書き込みの検討が極めて重要な意味を持ちます。しかし、こうした書き込みを広範な研究・学術利用に供するためには、どのような利用形態で公開するのがふさわしいのかという問題をクリアしなければなりません。

現在、新『マルクス／エンゲルス全集』(MEGA² (Marx-Engels-Gesamtausgabe))という全集プロジェクトが進行中ですが、マルクスの書き込みもこの全集に再現されます。しかし、この全集プロジェクトでは、刊本という形式とその編集上の制約から、必ずしも利用の便に優れているとは言いがたいものでした。

そこでまず、このデジタル版『哲学の貧困』の紹介にあたっては、この新『マルクス／エンゲルス全集』の話題から始めましょう。

この間、ドイツ、ロシア、オランダ、日本、更にはアメリカや中国の研究者および学術機関による国際的な取り組みとして新『マルクス／エンゲルス全集』の編集が進められています。その中心的な担い手は国際マルクス／エンゲルス財団でありベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーです。この全集はマルクス／エンゲルスの文献的価値のあるものすべてを網羅すべく企画された壮大な全集プロジェクトですが、マルクス／エンゲルスの旧蔵書での書き込みも収録されます。最新の調査によれば、彼らの旧蔵書1450点のうち、何らかの書き込みのある書物は総計800点余とされ、その総ページ数は約4000ページから5000ページの間だろうとされています。新『マルクス／エンゲルス全集』では、当初、欄外書き込みの再現に30巻の特別の巻を充てる予定でいたのですが、経費上の問題から2分冊巻に大幅に削減されました。

冒頭で触れた昨年11月のコロキウム(新『マルクス／エンゲルス全集』国際会議)では、この問題が取り上げられました。鄭文吉(韓国高麗大学教授)からは、刊本の削減に対する代替案として、刊本形式ではなくCD-ROMなどの電子媒体を用いた編集をすべきとの提案があり、さらに窪俊一から、窪と大村泉が共同で取り組んできた「東北大学附属図書館所蔵『哲学の貧困』マルクス手沢本のデジタル版」が紹介されました。今回、貴重書閲覧システムで公開するものはこれをもとにしたものです。

さて、このデジタル版で目指したのは刊本の単なるデジタル化ではありません。従来、新『マルクス／エンゲルス全集』での書き込みの収録巻では、下線や傍線に関する筆記用具(インク、鉛筆、

赤鉛筆、青鉛筆など）の違いは、点線や波線等によって再現し、また書き込みは本来書き込みが存在する箇所ではなく、刊本右側の欄外に一括して再現するというように、一読しただけではオリジナルの状態を容易に想定できない再現方法が採られていました。

窪と大村がこのデジタル化に着手したとき、この従来の方法も抜本的に是正すべきであると考えました。すなわち、下線や書き込みには画像の当該箇所にマークして注意を促す、文字による書き込みは、画像の当該箇所をクリックすれば直ちに別画面で解説原稿が現れるようにする、書き込みが何度も書き換えられた箇所の解説については、文章による解説を記号に代替し当該箇所を彩色して示す（記号で示すので母国語を異にするさまざまな諸国でも利用可能となる）また欧米などで既にデジタル・テキストとして存在する各国語訳もこのデジタル版に含めて参照可能にする、といった点です。

こうした観点から試作されたデジタル版のプレゼンテーションは、コロキウムで参加者から大きな関心と高い評価が示されました。

では、次に当図書館で公開されるデジタル版『哲学の貧困』の特徴に立ち入って紹介することにしてしましましょう。（なお、当図書館のホームページ上での公開は、技術上の問題などから、ここで紹介するデジタル版『哲学の貧困』のすべてではなく、その一部が公開されます。）

2. デジタル版『哲学の貧困』の特徴

『哲学の貧困』のデジタル版を作成するにあたって基礎にしたのはカール・マルクス著『哲学の貧困』（パリ＝ブリュッセル、1847年）のマルクス手沢本です。この刊本は最初マルクスの蔵書に属し、没後エンゲルスの手を経てドイツ社会民主党（SPD）のアルヒーフに属していたものでした。これが戦前のマルクス経済学者櫛田民蔵の手に渡り、1935年に東北大学に収蔵されるに至ります²。

この手沢本を可能な限りオリジナルに近い形で再現しようという試みは、1982年に刊行された田中菊次（東北大学名誉教授）によるファクシミリ版（青木書店）を嚆矢とします。田中はこの手沢本について、ファクシミリ版で次のように述べています。

「この版本の発見によって、われわれは、二つの重い責務を負うことになった。その第一は、この版本を、とりわけ、その中の書き込みの部分を、できる限り原態のままに保存することであり、その第二は、この版本を、できる限り広汎かつ完全な形で、学問的研究に供することである」³。

田中がファクシミリ版を作成してから20年を経た現在、手沢本は書き込みのインクの色も褪せてきたようです。今回のデジタル化によるオリジナルの「保存」は、その意味でも最後のチャンスであり、必要不可欠な仕事でした。

そしてまた「広汎かつ完全な形で、学問的研究に供すること」についても、今回のデジタル版『哲学の貧困』作成の大きな眼目です。この点について、いくつか述べておきましょう。

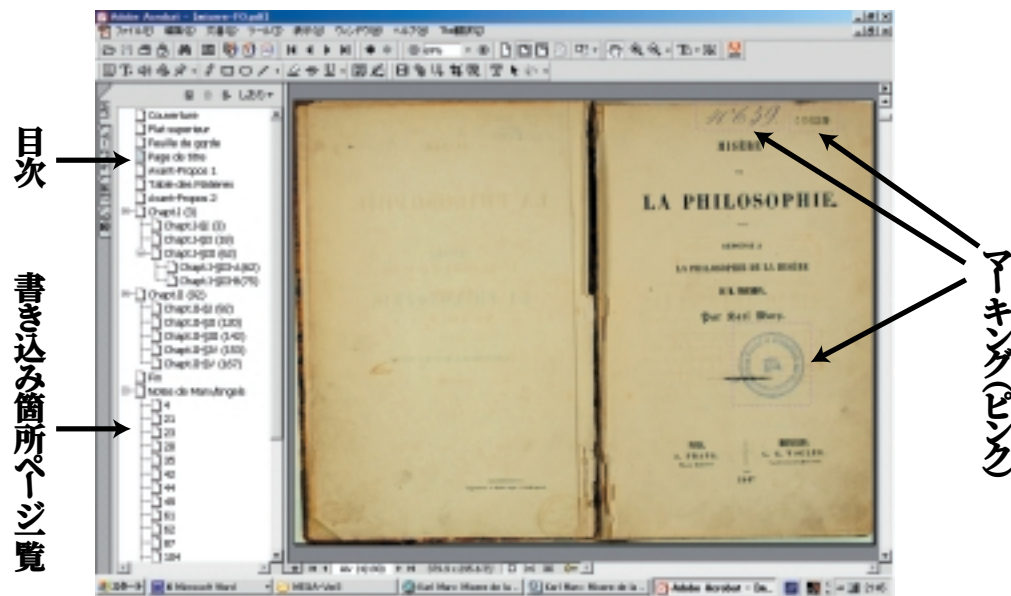
画像3は画面画像です。PDF ファイル化された『貧困の哲学』を基本テキストとして、初版本にそもそもなかったものをすべてマーキングしてあります。

これには、①マルクス／エンゲルスによる書き込みだけでなく、②彼等以外の手による書き込み（櫛田民蔵のものも含む）、③SPD アルヒーフの蔵書印、④東北大学附属図書館の種類のスタンプ等が含まれています。

2 注1を参照。

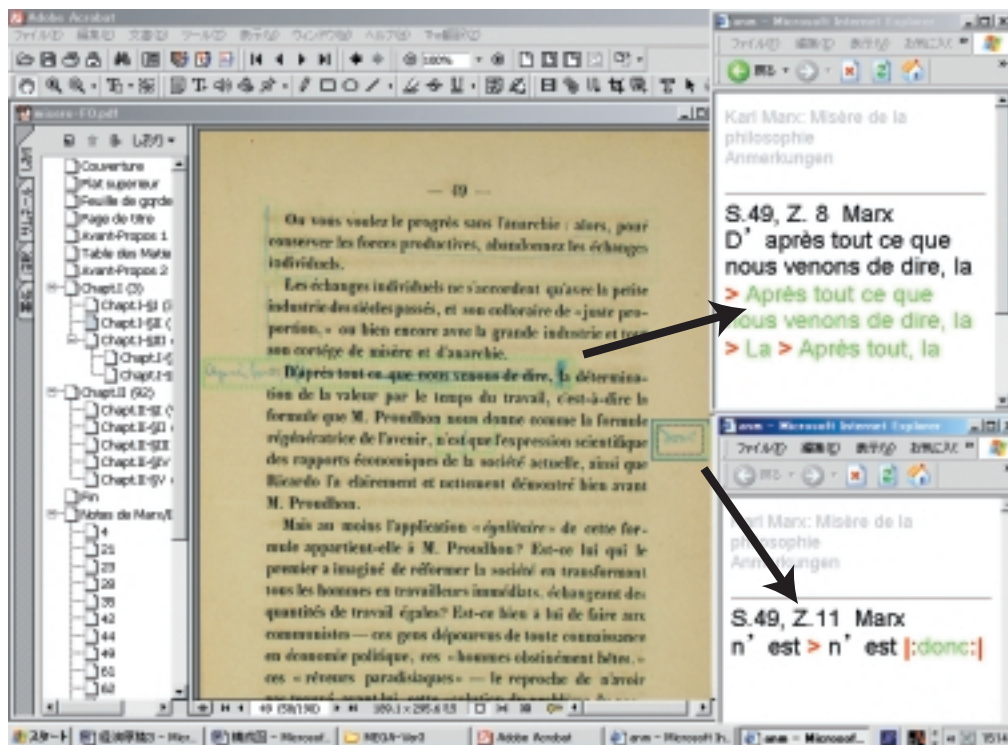
3 カール・マルクス著『哲学の貧困－著者自用・書き入れ・初版本－』（ファクシミリ版）編注・田中菊次、青木書店、1982年、10ページ（はしがき）。

画像3



また、マーキングは、その種類によって色を変えてあります。マルクス／エンゲルスの手になるものと思われるものは「緑」、SPD のアルヒーフのものは「ピンク」、東北大学図書館等のものは「水色」という風に点線で該当箇所を囲いました。

画像4



書き込み箇所 (49ページ) および解説参照ウィンドウ

下線や傍線などのような書き込みを除くマーキング箇所は全てリンクを作成し、別ウィンドウで該当箇所の「解説」ファイルを参照することができるようになっています。

参照できる「解説」テキストは、html ファイルとし、特定の「言語」によって説明するのではなく、新『マルクス／エンゲルス全集』で通常使用されている「校正記号」を使い、また、マルクス／エンゲルスによる削除・訂正を視覚的にわかりやすくするために、初版本を訂正した場合には、訂正・削除後の単語等は色を変えて明確にしています。

例えば、初版本のオリジナルテキストは「黒」、そのテキストが変更された場合には、変更後の該当箇所は「緑」、校正記号等は「赤」色という風に、視覚化することにより、変更箇所が一目瞭然となっています。また、プリントメディアのようにページをひっくり返したり、脚注を見るのではなく、同じ画面上の任意の場所に「解説」ウィンドウを開けることができます。

3. デジタル版『哲学の貧困』の意義

このように、今回のデジタル化では『哲学の貧困』手沢本の忠実な再現を心がけるとともに、その書き込みの解説を、田中およびリヒャルト・シュパール博士（ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー）らの真摯な協力を得てほぼ完了することができました。その成果が今回のデジタル版です。

マイクロフィルムの場合、内容確認には今日でもかなり大きな設備が必要ですし、田中のファクシミリ版は冊子なので机上での確認が可能ですが、印刷経費の問題から、着色は部分的であり、着色自体もオリジナルとは大きく異なっています。しかしこのデジタル版ですと、研究者が、東北大学附属図書館のホームページにアクセスしさえすれば、これまでほんの一握りの研究者にしか利用できなかった『哲学の貧困』オリジナルを、各自のコンピュータのモニター上で、視覚的にもほぼ完璧に現認でき、どこにどのような書き込みがあり、どのような種類のものであって、どのように判読すべきかも当該箇所をクリックするだけで明らかになります。

さらに、従来の刊本形式での再現では——MEGA1（旧『マルクス／エンゲルス全集』）MEW（Marx Engels Werke, 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』の底本）、田中ファクシミリ版、等々、いずれをとっても——、変更、削除、挿入などの書き込みの性格や、その順番は言語によって明らかにされているために、当該言語を解しない外国人には内容理解が不可能ですが、デジタル版ではこれらは全て記号化され、加えてオリジナル画像の現認もできるので、当該言語を十全に解さない外国人研究者にも、理解は容易であり、書き込みの拡大縮小はもちろん、解説文をオリジナル画像と同一画面に呼び出し比較することも自由にできます。

ここでもう一度、新『マルクス／エンゲルス全集』に触れましょう。マルクス／エンゲルスの旧蔵書のうち約800点には何らかの書き込みがあるといわれていますが、その全部が新『マルクス／エンゲルス全集』で再現されるわけではありません。経費上の問題から断念されたわけですが、私たちの『哲学の貧困』デジタル版で試みたデジタル・テクノロジーを活用すれば、こうした問題は容易に解決できるでしょう。また、オリジナルに忠実な書き込みの再現という点でも、従来の刊本形式よりも今回のデジタル画像の方がはるかに有効でしょう。

このように、マルクスの書き込みを極めて忠実に、しかも広範な利用者に対して活用度の高い形態で公開可能な点、また、新『マルクス／エンゲルス全集』の編集に新たな選択肢を提示した点において、この『哲学の貧困』デジタル版は、内外から注目されているのです。

さて、この『哲学の貧困』デジタル版について、次の事を付言しておきましょう。本年6月23日ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーにおいて「日独協力による MEGA デジタル化」をテーマに開催された国際会議の席で、大村および窪が主報告を行い、今後マルクス／エンゲルス書籍の欄外書き込みの編集では、刊本形式をとらずに『哲学の貧困』デジタル版に倣った方式をとることが確認され、新たな編集基準の策定に日独の研究者が協力して取り組むことになりました。『哲学

の貧困』デジタル版の編集方向と意義が、新『マルクス／エンゲルス全集』の編集において認められることになったのです。

Ⅲ 3点のフランス語版『資本論』における意外な発見

最後に、このマルクス／エンゲルス貴重書閲覧システム作成の過程でもたらされた意外な書誌的発見について紹介しましょう。

当図書館には、3点のフランス語版『資本論』が所蔵されています。その中の1点は、マルクスがパスカルに宛てた献呈本で、マルクスの自筆献辞入り本です（以下、パスカル本）。この献呈本は、河上肇、櫛田民蔵が戦前に所有していたものでした。この他にG・ドヴィルの名が記された刊本（以下、ドヴィル本）、中野文庫に所蔵された刊本（以下、中野本）の計3点のフランス語版『資本論』が当図書館に所蔵されています。

フランス語版『資本論』は、ドイツ語版『資本論』の2版にかなりの改訂を加えた版本です。したがってフランス語版『資本論』は、『資本論』研究においてドイツ語版とはまた独自の価値のある版本とされています。これは1872年から1875年にかけて、44分冊を9回シリーズに分けてパリで発行されました。翻訳者はジョセフ・ロア、発行はラシャトル出版社でした。この版本を、後年に出版された復刻版と区別して、ラシャトル版と呼びます。ウローエヴァの調査によれば⁴、ラシャトル版は9シリーズが順次発行された後、すべてのシリーズを仮綴して1冊の本としても発行されたと言われています。

この後、ラシャトルから出版社を譲られたアンリ・オリオルが、品切れとなった一部のシリーズを1884年に増刷します。また、ラシャトルの版本全体の復刻版を1885年に刊行します。これらは、紙型の組み換えなどがおこなわれ、ラシャトル版とは体裁の異なっている版本です。こちらは前者と区別してオリオル復刻版と呼びましょう。このオリオル復刻版については、印刷体裁の異なるいくつかの異本があることが知られています。

そこで、当図書館が所蔵するフランス語版『資本論』は、どちらの版本かを調べなければなりません。

ラシャトル版とオリオル復刻版との区別の一部を示すと次の表のようです。

表2 ラシャトル版とオリオル復刻版との区別（一部）

	印字、紙質	ラシャトルからマルクスへの手紙	マルクスのドイツ語版序文の日付	印刷所	巻末整理番号
ラシャトル版	良い	あり	1867年	ラユール	あり
オリオル復刻版	劣る	なし	1875年	その他	なし

復刻版の特徴は、紙質と印字がかなり劣り（復刻版は、紙が赤茶に変色し印字も読みにくいのに比べて、ラシャトル版は130年近くを経た今なお紙質や印字があまり劣化していません）、ラシャトルからマルクスへの手紙を欠いている点、マルクスのドイツ語初版への序文の日付が1867年から1875年に変更されている点、最後のページの整理番号がない点、印刷所がラユールとなっていない点、これらが特徴です⁵。

4 『不滅の資本論』A.B.ウローエヴァ著、佐藤金三郎訳、大月書店、1975年、150頁。

5 上記ウローエヴァ参照。これらの他にも両者の区分は、扉ページの絵が異なる点、挿画や文字飾りが異なる点、活字の段組が異なる点などが挙げられている。

こうした両版本の区分に照らして、当図書館が所蔵する3点のフランス語版『資本論』を調べてみると、意外なことがわかってきました。

パスカル本とドヴィル本

パスカル本については、すでに馬渡尚憲（宮城大学学長、前東北大学副総長・経済学研究科教授）の調査⁶によって、通しページで232ページ（29分冊）までがラシャトル版で、233ページ（30分冊）以降はオリオル復刻版とされています。つまり、マルクスの献辞の日付が1873年12月ですので、この時点ではラシャトル版はまだすべて発行されていませんから、マルクスはラシャトル版の9シリーズのうち、途中までをパスカルに献本し、後はパスカル自身がオリオル版を購入して綴じた本と推定されるのです。

馬渡の比較調査では、ドヴィル本が比較対象とされ、ドヴィル本はラシャトル版であるとされています。パスカル本は、マルクスが献本した分冊については確実にラシャトル版ですから、マルクスが献本した分冊と同一の体裁であれば、それはラシャトル版といえます。ドヴィル本はマルクスが献本した分冊まで、すなわち232ページまでパスカル本と同一であり、かつ、それ以降も紙質や印字が変わらず、巻末の整理番号があり、印刷所がラユールと印刷されている点などで、ラシャトル版の特徴を備えたものといえます。パスカル本の233ページ以降はオリオル復刻版ですので、ラシャトル版であるドヴィル本の同ページ以降とは、章タイトルの文字飾りや挿入画において異なっています（画像5）。

画像5 第22章 章タイトル飾りの違い



左パスカル本、右ドヴィル本。

次に、中野本を見てみましょう。

中野本

中野本は、すでに述べたラシャトル版とオリオル復刻版との区分でみれば、紙の変色具合や印字においてラシャトル版に近く、マルクスのドイツ語初版の序文の日付けが正しく、ラシャトルからマルクスへの手紙があり、巻末に整理番号が存在し、また印刷所がラユールとなっている点など、ラシャトル版の特徴を備えた版本です。

ところで、ウローニヴァによれば、オリオル復刻版にはいくつかの異本があることはわかっていましたが、ラシャトル版には異本がないとされています⁷。確かに、ラシャトル版であるパスカル本の232ページまでと、ドヴィル本のそれは同一で、違いは見当たりませんでした。中野本はラシャトル版の特徴を備えていますから、ラシャトル版に異本が無いのであれば、中野本もまた他の2点と同一であるはずですが。

6 馬渡「ラシャトル版『資本論』」『木這子』Vol.9, No.4 1985年。

7 同上、265ページ、注88。

しかし、意外なことに中野本は、パスカル本のラシャトル版部分、およびドヴィル本とは異なる箇所があるのです。画像6は、224ページの17章冒頭をそれぞれ並べたものです。飾りに囲まれた章タイトルに注目すると、パスカル本とドヴィル本は CHAPITRE X VIIで同一ですが、中野本は X VIIのみです。また飾りの左下に RAMBERT 1864とありますが、これは他の2点には存在しません。

画像6 第17章 章タイトルの違い



上左パスカル本、上右ドヴィル本、下中野本。中野本だけは章タイトルが異なる。

さて、233ページ以降になると、パスカル本はオリオル復刻版になりますから、ラシャトル版とは挿画や文字飾りなどの体裁が異なります。しかしまた、ラシャトル版の特徴を備えるドヴィル本と中野本とでも異なる箇所があります。画像7は、268ページですが、3点それぞれに異なる挿画となっています。

画像7 挿画の違い



左からパスカル本、ドヴィル本、中野本。

挿画がそれぞれ異なる。パスカル本はオリオル復刻版部分であり、紙が赤茶に変色しているのがわかる。

以上のことをまとめると、表3のようになります。

表3 3点のフランス語版『資本論』の版と異同例

	ラシャトル版の特徴 の当否	オリオル復刻版の特 徴の当否	224ページ章タイト ルと文字飾り	268ページ挿画
パスカル本	232ページまで該当 する	233ページ以降該当 する	CHAPITRE X VII	人物画
ドヴィル本	全体が該当する	該当しない	CHAPITRE X VII	楽器と楽譜
中野本	全体が該当する	該当しない	X VII RAMBERT 1864	楽器

この他にも、3点それぞれ異なる箇所が2箇所（331ページ、335ページ）あります。

まだ調査中ではありますが、これらのことを勘案すると、ラシャトル版にも文字飾りや挿画など、体裁の異なる異本が存在する可能性がでてきたのです。これが、今回の閲覧システム作成の過程で出てきた意外な発見でした。これは前述のウローエヴァの調査や新『マルクス／エンゲルス全集』にも記載されていないことです。

これは書誌的な事実ですが、このような事実が明らかになることで、フランス語版『資本論』刊行の詳細の一端が明らかになります。例えば、当時の社会状況の下では、社会主義思想は自由に表現できたわけではありませんから、ラシャトル版の刊行においても、妨害や障害がありました。こうした状況下で、ラシャトル版はどのように印刷されたのか。これらの事実の積み重ねによって、『資本論』およびマルクスの思想が、いかにフランスで普及・受容されていくのかを細部にわたって把握することが可能となるのです。

今回の調査は、挿画や文字飾りなどの違いに着目したのですが、これらが異なる以上、さらに本文自体の違いの有無も重要な調査課題となります。この点はまだ調査中のため結論は言えませんが、こうした調査・研究は、私たちがフランス語版『資本論』初版とみなしている書物について、そもそもフランス語版『資本論』初版とはどのようなものなのか、というシンプルかつきわめて根本的な問題を提起しているといえるでしょう。

さて、この書誌的な究明において、今回の貴重書閲覧システムのようなデジタル画像による閲覧は、比較の際にモニター上に画像を並べればよいわけですから、簡単には閲覧できない貴重書を机上で閲覧するよりも容易に細部にわたっての比較をすることができます。今回の3点のフランス語版『資本論』における意外な発見も、こうしたデジタル画像による比較検討が可能になったからこそ見出された事実といえるでしょう。

以上のように、今回のマルクス／エンゲルス貴重書閲覧システムは、広範な利用者への公開とオリジナルの厳密な再現をはかることを両立させるべく試みられた閲覧システムです。なかでもデジタル版『哲学の貧困』は、高度な学術・研究利用にも応えるべく作成されたものです。まだ端的な試みですから、利用者の方の声を聞きながらさらに改善させていくことも必要でしょう。今後も、こうした今日的な技術を用いた研究基盤が広く整備され、その基盤の上に立った学術・研究がいつそう進展することが期待されます。

【謝辞】

『哲学の貧困』マルクス手沢本のデジタル化に際し、田中菊次東北大学名誉教授、リヒャルト・シュパール博士（ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー）、クラウディア・ライヘル博士（ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー）から、書き込みの解説やデジタル版での再現方法について非常にお世話になった。また田中名誉教授からはデジタル版への教授のファクシミリ版転載をご快諾いただいた。シュパール博士、ライヘル博士からは、ドイツ帰国後もデジタル版改善のために有益なコメントを送っていただいた。記して厚く感謝の意を表する。

【付記】

- ・本稿のⅡ「デジタル版『哲学の貧困』マルクス手沢本」は大村泉、窪俊一「IT時代のマルクス研究—『哲学の貧困』マルクス手沢本デジタル化の試み」（『経済』2003年5月、新日本出版社所収）の要約・改稿である。この要約・改稿、「はじめに」、ⅠおよびⅢは久保が原案を作成し、最終的には三者協議の上成稿とした。
- ・本稿は2003年度科学研究費補助金・基盤研究（A）（1）研究課題名（課題番号）「IT活用による『資本論』第2部成立過程の全容解明と関連刊本・草稿のデータベース化」（課題番号：15203009、研究代表者：大村泉）および同萌芽研究「『哲学の貧困』マルクス自用本デジタル化とCD-ROM版新MEGA編集要項の策定」（課題番号：15652006、研究代表者：大村泉）、および東北大学教育研究協力基金2002年度助成研究「東北大学附属図書館所蔵貴重書・古文書のデータベース化」（研究代表者：大村泉）の研究成果の一部である。

経済学研究科研究支援者：久 保 誠二郎（くぼ・せいじろう）
情報学研究科助教授：窪 俊 一（くぼ・しゅんいち）
経済学研究科教授：大 村 泉（おおむら・いずみ）

連載 和算資料の電子化（１）：和算資料電子化計画の概要

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

東北大学附属図書館では、約1万1千点の和算コレクションを所蔵しています。これに狩野文庫に収録される古典資料を加算すると、約1万7千点の自然科学関係資料を所蔵していることになり、国内有数の自然科学系古典コレクションとなっています。

平成15年度の文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費で、「和算資料全文画像データベース」作成が予算化されました（作成委員会代表者：野家啓一文学研究科長）。附属図書館では、平成15年度中のウェブ公開をめざして、現在、約300点の資料の電子化を進めているところです。今後本誌では、連載というかたちで電子化にかかわる話題を紹介して行くこととしました。まず第1回目は、電子化計画の概要について説明します。

1. 電子化の意義

図書館資料の電子化の意義は、一般的に次のようなところにあると考えられます。

（１）利用の拡大

まず第1に、ウェブ公開による電子的な利用で、資料の利用機会が拡大されます。日本国内に限らず、海外における利用機会の拡大につながり、日本からの情報発信、日本研究の振興という観点からも重要な意味をもつことになります。

（２）資料の再発見

次に、電子化の際にコレクション全体を見直すこと、ウェブ公開でより多くの人間の目にとまることを通じて、資料が再発見されることが期待されます。

上記の2つのことは、研究者の増加と研究の進展につながることであります。

（３）資料の保存

最後に、資料の利用が電子的になることに

ともない、資料そのものを直接手にとって利用する機会を少なくすることが可能となります。このことは、資料そのものの保存という点で、重要な意義をもちます。

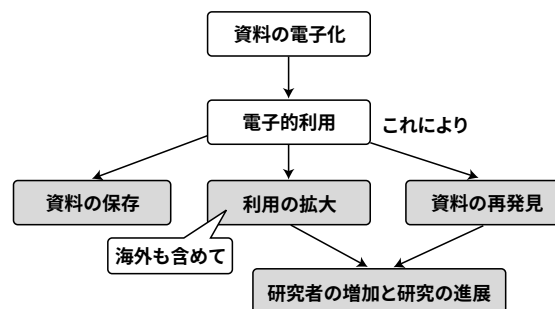


図1 図書館資料電子化の意義

2. 電子化の方式

（１）撮影

全文画像データベースでは、和算資料の全ページを撮影し、デジタル画像をウェブで公開することを目的にしています。そのためには、資料をデジタルカメラで撮影し、画像ファイルを作成すればよいと考えるかもしれませんが、しかし今回の計画では、マイクロフィルムで撮影することとしました。この方式をとった理由は、次のとおりです。

- ①世界的にも、資料を保存するための記録媒体としてはマイクロフィルムが標準であり、実績があること。
- ②デジタルカメラでの撮影に比べて、マイクロフィルムカメラでの撮影の方が、効率がよいこと。

（２）マイクロフィルム化

マイクロフィルムの規格としては、既に東北大学で制作・出版している狩野文庫マイクロフィルムと同じ、16mm モノクロマイクロフィルムを採用しました。16mm マイクロフィルムは、資料の自動頭出し検索ができるなど、35mm マイクロフィルムに比べて閲覧時

の操作性が格段によいものとなっています。

(3) デジタル化

デジタル画像は、マイクロフィルムをスキャニングして作成します。保存用のデジタル画像としては、TIFF形式ファイルを作成します。また、ウェブ公開用としては、このTIFF形式ファイルを変換して、PNG形式ファイルを作成することとしました。

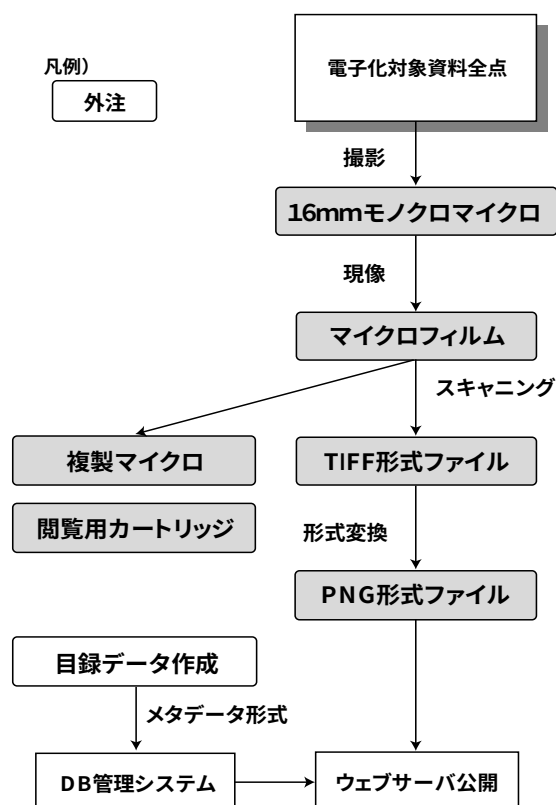


図2 和算資料の電子化手順

3. 電子化の対象

今回の予算規模では、コレクションの一部しか電子化できません。まずは、和算の研究・教育を行う上で最も基礎的な資料を選定することとしました。さいわい本学和算コレクションは、質量共に日本最大のもので、和算史を通覧するような資料の選択をすることができました。電子化する和算資料は、次のような種類に大別できます。

(1) 江戸前期刊本

まず最も基礎的な資料として、江戸期に出版された刊本があります。寛永から元禄年間

までの江戸前期に出版された刊本は、残存点数が少ないことから稀少価値をもっています。これらについては、基本的には全ての資料を収録することとしました。同じ資料名でも、版が異なるものは全点収録することとしました。

(2) 江戸後期刊本

元禄以降から江戸末期にかけての刊本については、研究書以外に数多くの教科書的な和算書が刊行されています。これらを全て収録することは不可能ですので、著名和算家の著作および著名和算書に限定して収録することとしました。

(3) 写本

刊本以外に、和算資料には多くの写本が存在します。刊本として出版されず、和算家の間で書き継がれていった写本は、点数にして本学和算コレクションの約半数をしめています。写本の割合がこれだけ多いというのは、和算関係資料の特徴といえます。これら写本については、原則としては平成15年度の電子化対象とはしません。しかし、写本でしか残存しない関孝和の著作など、基礎的な資料として重要なものは、今回の電子化の対象にする予定です。

(4) 塵劫記類

また、和算史の初期に刊行され、和算発展に大きな功績のあった和算書『塵劫記』については、その海賊版や類似書を含めて、本学和算コレクションには400点以上も存在します。これほどの質量の塵劫記類を収蔵するコレクションは、本学以外にはありません。今回は、江戸前期刊行の塵劫記類を中心に、塵劫記の系統が分かるように電子化を行いたいと考えています。

4. 公開方法

(1) データベース化

デジタル化した全文画像データは、書誌的な情報を付加したデータベースとして公開します。書誌的な事項については、ウェブ上の

情報資源のデータ形式として国際標準であるメタデータ形式で作成します。

(2) リスト表示

上記の目録データベースは、書誌情報のデータの全文検索が可能となりますが、その他にリスト形式の表示機能も用意します。これにより、和算書の内容種別や、年代順などのリスト提示ができるようになります。書名や著者名などが分からなくても、興味をもった資料を探して手軽に見てもらえるよう、分かりやすい解題をつけた年代順のリストなどを工夫してみたいと考えています。

(3) 英文情報

公開にあたっては、英文情報の付与もぜひ行いたいと考えています。和算という存在自体を、広く世界に知ってもらうためには、英文の書誌情報と内容説明が不可欠であると考えています。それには、和算研究者などの協力が必要と思っています。

5. 今後の計画

(1) 写本群の電子化

附属図書館では、平成16年度以降も電子化の予算申請を続けていく予定です。平成16年度は、写本群の中から重要な資料を選定し、写本でしか見ることのできない資料を公開したいと計画しています。

特に、和算の関連分野である測量術、天文・暦学等については、その多くは出版されることなく、写本というかたちで伝来しています。これらを電子化することで、さらに多くの分野の研究者に資するデータベースとなることができると考えています。

(2) 「江戸のモノづくり」研究との連携

平成13年度から、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究として「江戸のモノづくり」という研究活動が行われています。これは、江戸期の科学・技術を文献資料と器物資料の調査・研究を通じて、「モノづくり」という観点から見直す活動です。平成15年6～8月には国立科学博物館で特別展「江戸大博覧会」

を開催するなど、一般にも非常に注目される成果をあげています。研究は、各分野の課題の研究群からなり、それぞれの研究課題が独自の研究活動を行うとともに、関連する研究課題同士の共同研究も強く推奨されています。

(URL:<http://www.ied.co.jp/edomono/>)

和算関係では、「日本数学史料の所在調査と総合目録作成」(研究代表：佐藤賢一電気通信大学助教授)という研究課題があり、本学としてはその研究と連携した活動を計画しているところです。また、天文・暦学関係の研究課題もあるため、それらとも連携した活動を提案して行く予定です。

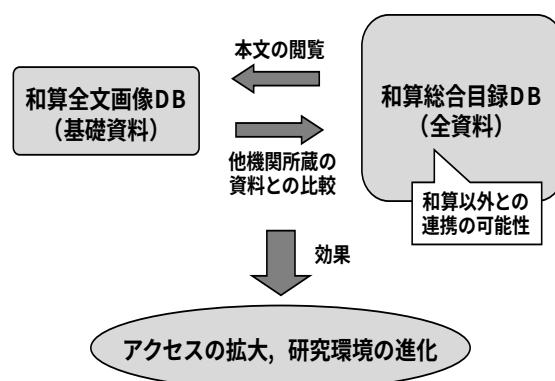


図3 「江戸のモノづくり」との連携

6. さいごに

以上、和算資料電子化計画の概要について紹介しました。和算資料の電子化により、研究者のみならずより多くの人々に、日本の文化としての和算を知ってもらいたいと考えています。そのために、和算資料のウェブ公開だけではなく、展示会の開催など地域の機関とタイアップした活動などを計画しています。

また、和算に関する解説資料の刊行や、和算資料そのものの複製出版なども企画し、本学が世界に誇る和算コレクションを大いに活用したいと考えています。

(よねざわ・まこと)

和 算 入 門

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

1. 和算ってなに？

和算とは、江戸時代に日本人によって展開された日本固有の数学で、単なる「そろばん（珠算）」による計算法にとどまるものではありません。

和算の最初の体系的著作は、寛永4年（1627）に刊行された吉田光由^{よしだ みつよし}の「塵劫記」^{じんこうき}です。この書がベストセラーとなり、以後江戸期を通じて、続々と和算書が刊行されました。

「塵劫記」では、そろばんの図解をまじえた割り算の説明が大半をしめ、さらに続けて検算や掛け算の説明をしています。また、大

きな数の単位・小さな数の単位の呼称、九九、米・貨幣の換算、利息、分配、枡の大きさ、体積、面積、租税、測量、平方根・立方根を説明しています。

また、挿絵とともに示された継子立、ねずみ算、入子算などの数学遊戯は、江戸時代を通して広く遊ばれた問題でした。絵をまじえて、庶民向けにパズル的な問題を興味をもてるようにまとめたことが、この書の独創的なところといえます。

さらに寛永18年（1641）の改訂版から、この書の巻末に世間の数学者に挑戦する問題（これを遺題^{いだい}といいます）を提示したのも大きな特色となっています。この遺題に解答し、さらに新たな出題をおこなう遺題継承が、その後の和算の発展の原動力となったのです。



図1 「塵劫記」の割算



図2 「塵劫記」のねずみ算

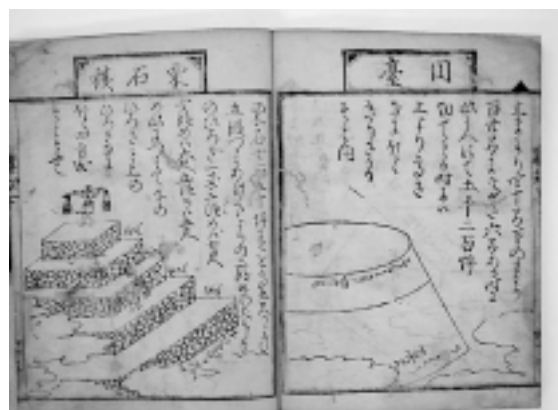


図3 「塵劫記」の遺題

2. 東北大学の和算コレクションとは？

東北大学附属図書館には、この和算書を中心とした天文学・暦学・測量学などの自然科学関係資料が約1万7千点所蔵されています。特に和算書については、現存する和算資料タイトルの3分の2を収録するといわれ、日本学士院のコレクションと並び日本最大規

模の和算コレクションとなっています。

またこのコレクションは、数量的に優れているのみならず、「割算書」「^{じゅがいろく}豎亥録」などの最古級の貴重書を多く収蔵しています。また、各種「塵劫記」だけで約400点も擁し、質量ともに最高水準のコレクションとなっています。

なお、東北大学の和算コレクションは、次のような複数の文庫などからなっています。

- ・林文庫（理学部数学教室の林鶴一教授の旧蔵書）
- ・林集書（林教授が各地で収集した資料）
- ・藤原文庫（林教授の後継者である藤原松三郎教授の旧蔵書）
- ・藤原集書（藤原教授が各地で収集した資料）
- ・岡本文庫（帝国学士院会員の岡本則録の旧蔵書）
- ・狩野文庫など



図4 東北大学本館書庫内の和算資料

3. 和算の代表的著作は？

「塵劫記」の刊行以降で、学術的な体裁をもった最初の和算書は、寛永16年（1639）に刊行された^{いまむらともあき}今村知商の「^{じゅがいろく}豎亥録」です。この書では、数学的な公式をすべて漢文で示し、必要最小限の説明でまとめています。この書の刊行23年後（寛文2年）には、今村の弟子である^{あんどうあります}安藤有益が、和文解説書である「豎亥録仮名抄」を刊行しました。

「塵劫記」に次いでベストセラーとなった

のが、万治2年（1659）に刊行された山田正重の「改算記」です。この書は、「塵劫記」をはじめとしたそれまでの和算書の誤りを正すとともに、遺題に対する解答を与え、巻末にさらに遺題を掲載することで、遺題継承の形式を定めたといわれています。従来の和算書にくらべて読みやすい点が世間に受入れられましたが、学問的な評価は高くないといわれています。

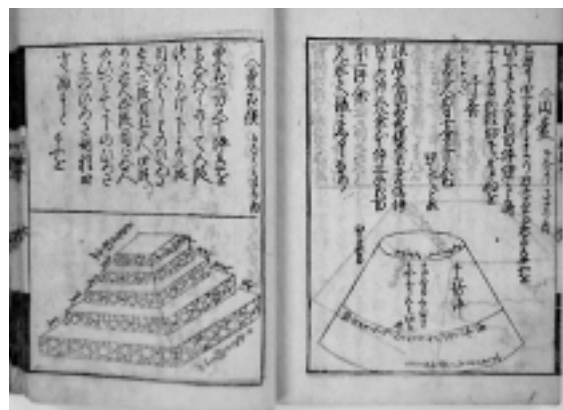


図5 「改算記」の遺題解答

次いで著名なのは、「改算記」と同年の万治2年（1659）に刊行された^{いそむらよしりの}磯村吉徳の「^{さん}算^{ぼうけつ きしやう}法闕疑抄」です。この書は5巻からなり、第1巻から第3巻では「塵劫記」同様に数学的な問題をていねいに解説しています。さらに第4巻では、先行する「塵劫記」の遺題解答の誤りを正し、第5巻では新たに遺題100問を提出しています。増補版となる「増補算法闕疑抄」では、自分自身でこの遺題100問に解答をあたえています。この書もベストセラーとなり、多くの人に読まれました。

当時江戸で磯村の塾と人気を二分したのが^{むらまつしげきよ}村松茂清で、寛文3年（1663）に^{さんそ}「算俎」を刊行しました。この書は、円周率と玉率（球の体積）の論争に終止符をうったこと、玉率を求める際に積分の考え方をういたことで評価されています。また村松は赤穂浅野家に仕え、後に婿養子と孫が四十七士討入りに参加したことも有名です。



図6 「算組」での円率計算

江戸前期の和算を集大成し、日本の高等数学の出発点となったのが、延宝2年(1674)に刊行された関孝和の「せきたかかず発微算法はつ さんぼう」です。この書は、多元高次の連立方程式となる問題の解答を示していますが、その解法について解説していないため、当時は理解できない和算家もありました。また、出版後に火災で版木が焼失したこともあり、広く流布することはなかったようです。

しかし、関の弟子であるたけ べ かつひろ建部賢弘が、貞享2年(1685)に刊行した解説書「せきたかかず発微算法演段諺解」により、広く知られるようになりました。関孝和以降は、その後継者からなるせき関流やその他の流派が、和算の発展を支えて行くことになります。ちなみに、林鶴一教授も関流の継承者であり、関流の免許皆伝を受けています。

幕末から明治にかけての洋学の導入にとともに、西洋流の数学が急速に普及しました。和算もその流れに抗うことはできず、明治5年の学制公布以降、徐々に公的教育の場から姿を消して行くことになります。

4. 和算と東北地方の関係

江戸期の学問の中心地は江戸でしたが、江戸初期の和算の中心地は、京都あるいは京阪地方でした。「塵劫記」の吉田光由の師であり、和算の開祖と呼ばれる毛利重能は、京都

に割算指南所を開設しています。また、吉田光由は京都の豪商すみのくらけ角倉家の一員で、その経済力をバックに「塵劫記」を出版したといわれています。

その後、政治・文化の中心が江戸に移るのと同様、和算研究の中心も江戸となり、多くの和算家が江戸を舞台に活躍します。和算の普及とともに、地方にも埼玉の至誠賛化派、山形の最上流さいじょうりゅう、関西の詫間流などさまざまな流派が出現しますが、その中心が江戸から離れることはありませんでした。

仙台藩に和算をもたらししたのは、といたやすけ戸板保佑という和算家でした。徳川吉宗の指示により開始した宝暦の改暦(1754)の際、これに携わった京都の土御門家が、関流第3代宗統のやまじぬしづみ山路主住に提出させた関流の暦算書を、戸板に写させました。その時できあがったのが関算四伝書500冊と天文四伝書300冊でした。前者は伊達家が預かることとなり、現在、宮城県図書館で所蔵する県重要文化財となっています。後者は土御門家に秘蔵され、現在は天理図書館所蔵となっています。

以後、藩としての奨励があったためか、一関藩など仙台領のいたるところに和算が普及し、和算家の多さは他藩にないほどだったといわれています。林集書に収められた名取文庫の旧蔵者であるなとりはるなか名取春仲は、この戸板保佑の弟子の天文学者で、その蔵書は宮城県岩出山町の名取家に伝えられていたものでした。

本誌掲載の関連記事

- (1) 吉田忠, 東北大学所蔵和算関係資料について, 木這子, Vol.3, No.4 (1979), pp.1-2
- (2) 土倉保, 本学所蔵の和算書をめぐって, 木這子, Vol.24, No.3 (1999), pp.1-6

(よねざわ・まこと)

研究者等作成データベース公開事業の開始

総務課情報企画掛長 米 澤 誠

1. はじめに

附属図書館では、学内外の研究者などが作成したデータベースを受入れ、図書館のウェブサイトから公開する事業を、平成15年度から開始しました。（ニュース記事：URL：<http://www.library.tohoku.ac.jp/libnow/libnow.html>）

大学の研究者は、調査・研究活動の副産物として、様々なデータベースを作成しています。しかし、その多くは研究者の手元や研究室に埋もれてしまい、ウェブで公開するに至らないものです。東北大学では、図書館のもつサーバ資源とデータベース化の技術により、有用な研究情報の発信を支援することとしました。この事業により、平成15年9月現在「和算資料目録データベース」など2種類のデータベースを公開しています。

2. ねらいと背景

今回の事業化は、次のような3つの方面からのニーズに対する一つの解答と位置付けて考えています。

2.1 大学側のニーズ

社会貢献という観点から、近年、大学から情報を発信することが要請されています。東北大学においても、「研究者情報」のウェブ公開など、大学全体としてこのようなニーズに取り組んでいます。

また、特色のある情報を発信する方策として、図書館などで所蔵するユニークな資料について、学内経費で電子化を行う事例も多くなってきました。平成14年度には、図書館で所蔵する次のような資料の電子化を実施する

ことができました。

- （1）マルクス関係資料（担当：経済学研究科）
- （2）秋田家史料（担当：文学研究科，
URL：<http://www2.library.tohoku.ac.jp/akitake/>）
- （3）狩野文庫古地図（担当：附属図書館，
URL：http://www2.library.tohoku.ac.jp/kano/kano_top.html）

また、東北大学史料館では、同館で所蔵する「東北大学関係写真」の画像データベースを作成しました。これら学内経費で作成したデータベースを、効率的にウェブで発信する組織としては、図書館が適切であると考えています。

2.2 研究者側のニーズ

研究者においては、次のような状況となっています。

調査・研究活動の過程もしくは結果の副産物として、従来より増して、様々な種類のデータベースが作成されています。これは、Excel や Access などの、簡便にデータベースを作成することができる環境が普及したことによるものです。

しかし、学内の各組織のウェブサイトを調査した範囲では、研究者個人もしくは研究室で作成したデータベースが公開されているという事例は、まだ少ないというのが現状です。

これは、データベース作成技術が普及した一方、ウェブでの発信技術は一般化していないことが原因と考えています。また、大量の画像データを扱う場合などは、ウェブで発信

するためのサーバ資源に制約があるとも考えられます。

このような状況をふまえ、図書館がウェブでの発信部分を支援することにより、研究活動の成果を広く公開することができると考えています。

2.3 図書館側のニーズ

図書館は、インターネット上の情報資源が増大する中で、新たな役割を果たす必要がでてきました。それは、従来の印刷体の情報だけではなく、それらインターネット上の情報資源を選択・組織化し、研究者に提示するという役割です。東京大学の「インターネット学術情報インデックス (Index to Resources on Internet:IRI)」のようなメタデータの作成と提供は、その一つの試みです (URL: http://resource.lib.u-tokyo.ac.jp/iri/url_search.cgi)。東北大学でも、国立情報学研究所 (NII) での全国的なメタデータ・データベース構築事業に積極的に協力し、学内ウェブ情報のメタデータを作成しています。

また、メタデータだけではなく、データそのものを組織化してインターネットで発信す

るということも、図書館が果たす新たな役割です。経費が確保できれば、神戸大学震災文庫 (URL:<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/index.html>) のように独自のデータベースを作成することができます。しかし、本学のように特別な予算措置のない状況では、研究者が既に作成したデータベースを掘りおこして公開するという方式で、さまざまなデータベースを公開することができるのではと考えたわけです。

3. 実施体制

3.1 受入要項の整備

データベースの受入を組織的かつ継続的に実施するために、まず受入要項を作成しました。作成にあたっては、国立情報学研究所で実施している「研究者等提供データベースの受入」の考え方を参考にしました (URL: <http://www.nii.ac.jp/sokuho/man/manapp.htm>)。東北大学の要項では、研究者からの申し出を受け、図書館がデータベースを受入れ、公開するという枠組みとなっています。受入要項には、受入対象とするデータベースは、次のようなものであることを示

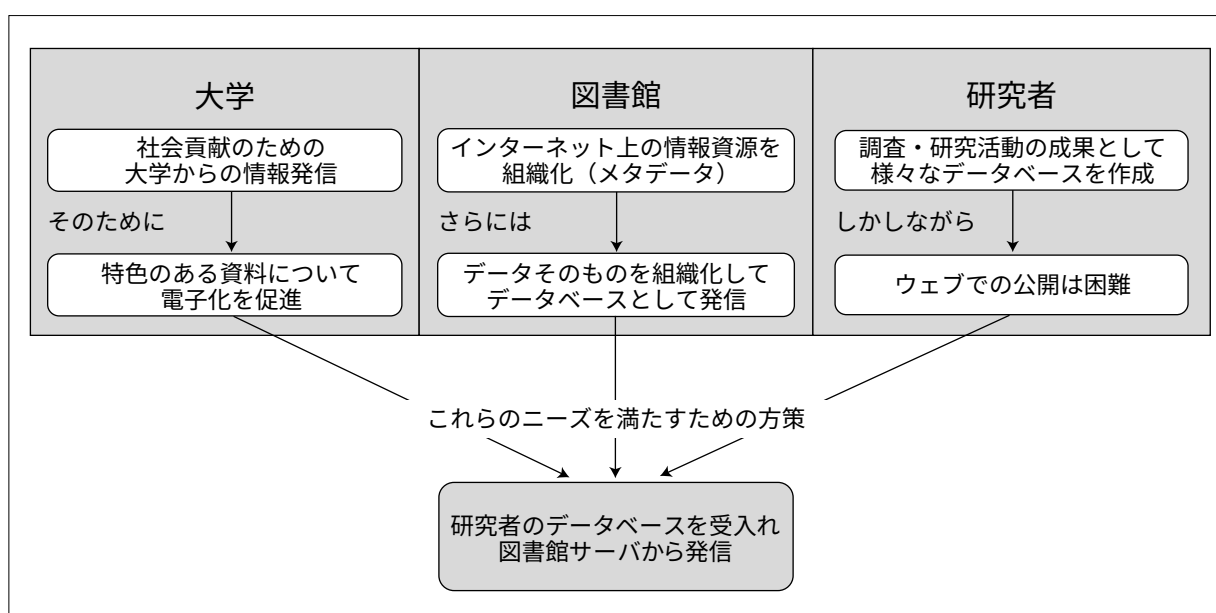


図1 研究者等作成データベース公開事業のねらい

しています。

- ・研究者等が作成したもので、継続的に維持・管理される見込みのあるもの。
- ・学術的な内容を持つもので、研究・教育上有用なもの。
- ・図書館ウェブサイトで公開するにあたり、著作権上問題のないもの。
- ・図書館の組織及びコンピュータ等資源において、公開が可能なもの。
- ・データベースの提供が無償のもの。

また、受入の条件としては、次のような点を示しています。

- ・提供データベースの公開方式等に関して、事前に協議すること。
- ・データベースのマニュアル等の作成に協力すること。
- ・データベースの内容等に関する利用者からの問合せ対応に協力すること。
- ・データベースの信頼性及び最新性の維持に努め、更新データを速やかに提供すること。

これらの条件は、受入るデータベースを制限しようとするためのものではなく、できるだけ協力的かつ継続的にデータベースの維持・管理を行うための相互了解事項だと考えています。

3.2 設備

この事業を実施するために、特別あらたな設備は導入しませんでした。現在、データベースを管理し、公開するサーバ資源としては、平成12年度に導入した電子図書館システムを利用しています。

4. 受入から公開までの流れ

データベースの受入から公開までの手順は、次のようになっています。

(1) 研究者からの申し出と協議

書類申請の前に、データベースの内容や公開条件などについて、協議を行います。

(2) テストデータの受領、データベース・ファイルの設計とデータ変換

原データは、Excel 形式か CSV 形式で受領することを想定しています。それらの形式からデータベースロード形式への変換は、Excel のマクロなどを使って行います。

現在、データベース環境としては Open-Text を使用していますが、今後は MySQL に切り替えていく予定です。

(3) 公開インターフェイスの設計と試作

現在の公開インターフェイスである「学術情報ポータル」は、INFOCOM 社の Infolib-Book というシステムを利用し作成しています。(URL:<http://www2.library.tohoku.ac.jp/>)

今後は、データベースの特色にあわせたインターフェイスを設計するために、PHP で作成する方向で検討しています。

(4) 本データの受領とデータロード

(5) 公開・広報

5. 今後の課題と予定

5.1 公開技術の改善

前章に述べたように、現在、より融通のきくデータベース管理システムと公開インターフェイスに切り替えるための準備を進めています。MySQL と PHP などを組み合わせて使うことにより、全文検索だけではなく、動的にリストを提示するなど、いろいろ工夫したインターフェイスが可能となります。特に漱石文庫などの完結したコレクションの場合は、資料を単語で検索するだけでなく、コレクション全体をブラウズすることが有用なので、分類毎のリスト形式の提示などが必要だと考えています。

5.2 人材の育成と手順の標準化

現在、MySQL や PHP などを使いこなすことができるのは、特定の担当者だけです。配置換えへの対応や人材の育成という観点から、より多くの職員がこのような技術を習得する必要があります。今後は、これらの技術と知識を習得するための研修会や OJT (On the Job Training) を行いたいと考えています。

また、Excel 形式や XML 形式の原データを変換し、MySQL に搭載する手順の標準化も図る必要があります。データ変換技術については、今までの経験からある程度標準化した上で、研修会や OJT で定着させたいと考えています。

5.3 今後の予定

現在公開しているデータベースは、次の2種類です。

- (1) 東北大学所蔵和算・自然科学関係と漢古典書目録データベース (通称「和算資料目録データベース」)
- (2) 秋田家史料データベース (一部、全文画像データを含む)

※ 新インターフェースで試作済み (詳細については、本誌 Vol.28, No.1 を参照のこと)

また、今後は次のようなデータベースの受入・公開を予定しています。

- (3) マルクス関係貴重資料画像データベース (通称、「デジタル・マルクス」)
- (4) 漱石文庫関係文献目録データベース
- (5) 「東北数学雑誌」記事索引データベース
- (6) 日本獣医史コレクションデータベース

6. さいごに

研究者が作成したデータベースの公開を図書館が支援するという試みは、まだ始まったばかりのものです。今後さらに実績をつくり、評価してもらう必要があると考えています。図書館のサイトから公開するデータベースが充実することで、さらに多くの研究者の関心を集めてゆきたいと思います。

学内の学位論文や研究論文、報告書などの、研究成果そのものの収集・発信を行う活動は、機関レポジトリとして注目されつつあります。われわれのデータベース受入事業は、研究者のもつデータを収集するという意味で、この機関レポジトリの一種といえます。この事業を研究者に対する新たな研究支援活動として位置付け、継続的に取り組んでいきたいと考えています。

(よねざわ・まこと)

平成15年度東北大学附属図書館企画展

「明治・大正期の文人たち－漱石をとりまく人々－」開催

附属図書館では本年も下記のとおり10月31日から企画展を開催いたします。

今年は「明治・大正期の文人たち－漱石をとりまく人々－」というテーマのもとに、文豪・夏目漱石の生涯と作品、朋友・正岡子規との出会いと交流、土井晩翠、狩野亨吉ら同時代の文人たちとの親交、小宮豊隆や阿部次郎ら門下生との関わりを、本館が所蔵する「漱石文庫」の資料を中心に、約100点の資料を展示し、紹介いたします。また新たに収蔵した漱石関連の資料、約20点も公開の予定です。

11月2日には、東北大学文学研究科・佐藤伸宏教授による記念講演会も開催いたしますので、多数のご来場をお待ちしております。

■展示内容

第1部 漱石と子規

学生時代に始まり、子規の死によって閉じる、漱石と子規との類稀な文学的朋友関係を、新資料を交えて紹介します。

第2部 漱石と同時代の文人たち

漱石と、狩野亨吉や土井晩翠との交流、ケーベルや魯迅との影響関係について紹介します。

第3部 漱石門下と東北帝国大学

小宮豊隆や阿部次郎ら、東北帝国大学の教官となった漱石門下の文人たちを中心に紹介します。

■開催期間

10月31日（金）～11月9日（日） 10：00～17：00（10月31日（金）は14：00から、土曜・日曜・祝日も開催）

■会場

東北大学附属図書館大視聴覚室（仙台市青葉区川内）※入場無料

■記念講演会

講師：東北大学文学研究科 佐藤伸宏教授

演題：明治三十三年の漱石、子規、晩翠

日時：11月2日（日）14：00～16：00

会場：東北大学附属図書館本館2号館4階会議室

※入場無料

■問合せ・交通

問合せ先：東北大学附属図書館総務課庶務掛

TEL 022-217-5911

交通：仙台駅西口バスプール9より、青葉城址循環・青葉台・宮教大・成田山行、扇坂下車、徒歩3分

※駐車場がありませんので、自家用車でのご来場はご遠慮ください。

■その他

附属図書館は、仙台市博物館企画展「国宝『史記』から漱石原稿まで－東北大学附属図書館の名品－」（会期：10月31日（金）～12月21日（日）月曜休館）に特別協力いたします。詳細は仙台市博物館までお問い合わせください。

—漱石をとりまく多彩な顔ぶれ—



狩野亨吉 (1865－1942)



正岡子規 (1867－1902)



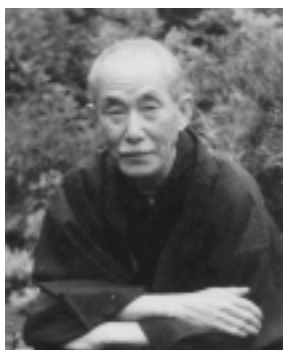
夏目漱石 (1867－1916)



ラファエル・フォン・ケーベル
(1848－1923)



阿部次郎 (1883－1959)



小宮豊隆 (1884－1966)

写真提供・協力／神奈川近代文学館，松山市立子規記念博物館，岩波書店，東北大学史料館

田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示「未知への挑戦」を開催

附属図書館では、本学卒業生である田中耕一氏の2002年ノーベル化学賞受賞を記念した展示「未知への挑戦：田中耕一氏と東北大学」を平成15年7月から開催しています。

今回の展示は、東北大学での田中氏初講義にあわせて開催したものです。田中氏の研究業績を正確に分かりやすく紹介することを第一の目的とし、研究内容の解説パネルや論文を中心とした展示内容となっています。また、田中氏の研究上のエピソードや田中氏自身から学生へのメッセージを紹介しており、全体として本学学生をはじめとした若い研究者に勇気をあたえ、学習意欲を高める内容となっています。

観覧者数はすでに4千人を超えていますが、特に7月30～31日に開催された東北大学オープンキャンパスでは、約千人の高校生が興味をもって観覧していました。

なお、この展示は今のところ終期を予定していません。また、学外の方でも無料で観覧できます。

・場所：附属図書館本館エントランス

・開館時間：

[平日] 午前9時～午後9時 ※

[土日祝] 午前10時～午後5時

※休業期間中は、午後5時までです。

・入場は無料です。

・駐車場はありませんので、お車での来訪はご遠慮ください。

(総務課)



熱心にパネルを読む田中氏



オープンキャンパス時の展示コーナー

平成15年度目録システム地域講習会を開催

附属図書館では、平成15年6月18日から20日までの3日間、国立情報学研究所との共催で、目録システム（図書コース）地域講習会を開催しました。

目録システム講習会は、目録作業担当者の図書館職員が、国立情報学研究所の目録システムの利用・運用に関する知識・技術を習得するための講習会です。

講習会は、「目録システム概論」、「目録情報の基準」、「目録検索」等のカリキュラムに沿って、国立情報学研究所の担当者研修を受講した図書館職員を講師（6人）及び講師補

助者（9人）により、これまでの業務上の経験並びに最新の情報に基づき、講義・実習が行われ、東北地区大学図書館、高専の図書館、宮城県図書館と北海道地区から1名の図書館職員を含めて22名の参加がありました。

講習会では、パソコンの機種の違いや業務歴によって、戸惑う受講者もいましたが、講師等の熱心な指導と受講生の真摯な受講姿勢とが相俟って充実したものとなり、終了後、受講生からは感謝の意を述べた感想がよせられました。

（総務課）

第58回東北地区大学図書館協議会総会

第58回東北地区大学図書館協議会総会は、平成15年9月18日～19日の両日、東北福祉大学図書館を当番館として、加盟44館から72名の参加を得て開催された。

総会における主な協議事項並びに各部会での協議事項は次のとおりである。

1. 大学の授業と密接に連携した学生用図書

整備のあり方について

2. 図書館利用者教育について

3. 第59回総会以降の日程の変更について

4. 平成15年度合同研修会について

次回総会は、山形大学附属図書館を当番館として開催することになりました。

会 議

◎学 内

15. 7. 3 第2回分館長会議

・協議事項

1. 平成15年度図書館資料費（課外教育費）の配分について

・報告事項

1. 国立大学図書館協議会第50回総会について
2. 学生用図書整備検討委員会について
3. 外国雑誌センター館（医学分館）の現状について
4. 学術情報整備計画について

5. 図書資産 DB の構築（図書台帳等の入力）日程等について

6. その他

- ・X端末増設のための目録カードボックス移動計画について
- ・田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示について

15. 9. 4 第3回分館長会議

・協議事項

1. 中期目標・中期計画について
2. 学術情報整備計画（2004年）について
3. 学生用図書の整備について

・報告事項

1. 平成15年度第2回商議会の開催について
2. 平成15年度第1回川内地区図書委員会について
3. 会計検査院会計実地検査結果について
4. 法人化後のILL複写料金相殺制度について

5. その他

- 1) 自由閲覧室等の机の落書きについて
- 2) 開架図書へのバーコード添付作業について
- 3) 本館2号館側壁の一部落下について
- 4) 田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示について

人 事 異 動

平成15年10月1日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
15. 9.30		佐 藤 芳 宏	総務課会計掛長	辞 職
"		尾 田 陽 子	事務補佐員（情報管理課図書情報掛）	"
15.10. 1	文部科学事務官（東京大学文学部図書室図書第一掛）	阪 脇 孝 子	文部科学事務官（情報サービス課参考調査掛）	転 出
"	総務課会計掛長	原 田 正 己	研究協力課専門職員	配置換
"	文部科学事務官（情報サービス課参考調査掛）	吉 植 庄 栄	文部科学事務官（北青葉山分館管理掛）	"
"	文部科学事務官（北青葉山分館管理掛）	尾 田 陽 子		採 用
"	事務補佐員（情報管理課図書情報掛）	大 津 亮 子		"

編 集 後 記

梅雨明けのないままやってきた10年ぶりの冷たい夏、その後の思いがけない残暑も過ぎて、いつのまにかさわやかな秋となりました。気がつけば国立大学の法人化まであと半年あまり。大学のなかは法人化の準備のため、全職員が気の遠くなるような忙しさの中で奮闘しています。図書館のなかだけ見ても、昨年来の資産台帳整備のための蔵書点検や、企業会計研修、法人会計移行後の図書館業務の点検や制度設計のための各種ワーキンググループの立ち上げな

ど、忙しさの種は枚挙にいとまなしというところでしょうか。これらの法人化準備を抱えながらも通常業務は滞りなく粛々と進めなければなりません。制度が大きく変わる今この時を乗り越えるのは本当に大変ですが、「私たちは歴史の転換点にいるのかもしれない、将来の大学図書館の方向を大きく決定する現場にいる。」との気構えを持ちながら、残り半年にラストスパートをかけたいものです。（Y. I.）

東北大学附属図書館報「木這子」 第28巻第2号（通巻103号）発行日 平成15年9月30日

発行人 坂上 光明 広報委員長 清水 二郎

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>